# 残りの期間 精いっぱい通ろう

教祖百四十年祭

「眞明組おやさと伏せ込みひのきしん」の参加者。ご本部秋季大祭後、６つの大教会から1,500人を超える方が、西境内地でのひのきしんにいそしんだ（10月26日）


# 真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06（6702）1980
FAX 06（6700）1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社


**どうでも一つ、仕切り根性、仕切り力、仕切り智慧（ちえ）、仕切りの道、どうでもこうでも踏まさにゃならん。**

**明治40年5月8日　おさしづ**

教祖百四十年祭まで残りわずかとなりました。この年祭に向けては、それぞれの教会、ようぼくが自分たちで心を定め、その完遂に向けて三年千日を通ることを申し合わせてきました。

このたすけの旬に、大きな喜びをお見せいただいた方もいれば、なかなか思い通りの結果が表れず、半ば諦めている方もいるかもしれません。それでも最後の最後までやり切る努力を止めてはなりません。

「仕切り根性、仕切り力、仕切り智慧（ちえ）」とのお言葉通り、三年千日と仕切った活動の最後の日まで、自分の持てるありとあらゆる精神、力、知恵を振り絞って、人をたすける道を歩ませていただくことこそ、年祭活動締めくくりの動きです。

三年千日は、私たちに「成人させてやりたい」との親心から用意してくださっている貴重な期間。「このまま過ごしては、時間がもったいない」「今からでも遅くない、まだ間に合う」と自分の心に強く言い聞かせながら、残りの期間を精いっぱい通り切って、大きく成人した姿を教祖にご覧いただこうではありませんか。

## 四方正面

年祭活動も大詰めを迎え、全教が一層拍車を掛けて動く中、私は身上お手入れから入院を余儀なくされ、動くことができなくなった。

病室で悶々とした日々を過ごしていたが、そんな中でも朝に夕におつとめを勤める時間はとても心が安らぎ、日々頂戴する親神様の十全の御守護に自然と感謝の心が湧いてきた。そして年祭活動は多くの方の支えがあってつとめることができているなど、さまざまな気付きを与えてもらう機会でもあったように思う。

**やむほどつらいことハない**
**わしもこれからひのきしん**

やっと動けるようになって久しぶりに周辺のリーフレット配りをしたとき、何とも清々しい気持ちで回らせていただくことができた。

教祖百四十年祭は成人の一里塚、銘々が定める目標に向かって最後まで感謝の心を忘れずにつとめ切りたいと思う。

（洋）

《秋季大祭神殿講話》

# 最後の一日まで明るく勇んで一生懸命に進ませていただこう

大教会長　井筒梅夫

## 節にこもる親心

人生において、「節」はつきものだと言えます。節には、個々に見せられるものもあれば、家族や教会にも節が起こります。

おさしづで、

**ずつない事はふし……**

**明治27年3月5日**

**もうあかんかいなあ〳〵というは、ふしという。**

**明治37年8月23日**

と教えられます。ずつないとは、なす術がない、という意味ですから、節というのは、「もうどうしようもない」というほどの出来事を言うのです。厳しい身上や事情。こんなものは、つらいに決まっているのです。誰もが避けたいのが節です。しかし、親神様は、

**さあ〳〵ふし〳〵、ふし無くばならん。ふしから芽が出る。**

**明治22年5月12日**

と、各々の人生においても、それぞれの教会の上でも、節はなくてはならないものだと教えてくださるのです。節がなければ、なかなか心が定まらないのかもしれません。そして、この節から芽が出る御守護を頂くのです。これがお道の信仰です。節から芽が出るとは、節を通して成長をし、心の成人をする姿であると思うのです。

節に遭遇した際にまず心を向けるべきことを、真柱様が「諭達第四号」に、**「成ってくる姿はすべて人々を成人へとお導き下さる親神様のお計らいである」**と示されるように、節は、この者を成人させてやろうという親神様の思惑があります。節の中に親心を感じ取ることが実に大切です。

節に遭遇したときは、つらくしんどい状況ですから、すぐに親心を感じ取ることは難しいのです。しかし、すぐに感じることができなくても、時を経てから振り返ったときに分かっても、決して遅くないのです。

## 父の出直しを思案する

私にとって一番の大きな節は、父である前会長の出直しです。撫養の土佐家から養子に来た父は、その翌年に会長に就任しましたが、当時、芦津には大きな事情がありました。それを知った父は、「初代の信仰に立ち返ろう」「教祖ひながたの道を辿ろう」と決心し、大教会の土地建物を売却して本部に献納し、芦浪分教会に間借りをして、再出発をしたのです。

そして父は、部内教会、布教所の先々まで足を運んで、おたすけと丹精に明け暮れる中に、人が集まり真実が寄ってきて、今の大教会の土地に、現在の伏せ込み棟を神殿として移転をし、その後、現在の神殿建物や詰所の普請をするなど、芦津中興の祖としての役割を果たしたのです。皆をぐいぐいと引っ張っていく一方で、繊細かつ大きな心で、芦津の人々を温かく抱きかかえていましたので、たくさんの人から慕われ、頼りにされる人柄でした。

その父が出直したのは、今から41年前の、教祖百年祭の年祭活動のさなかで、私は25歳でその跡を継ぎ、大教会長に就任しました。

教祖百年祭は大いに盛り上がった年祭活動で、その動きの中心が、東西礼拝場ふしんでした。着手から竣工式まで6年7カ月を有し、期間中、ひのきしんに伏せ込んだ人々は22万人に及ぶ、お道の歴史の中でも、世紀の普請でした。

この普請において、ふしん委員会副委員長・実施部長という立場を頂いて、現場の責任者として、毎日ヘルメットと作業着で現場に出向いた父でした。憩の家に入院中も、病室からヘルメットと作業着で現場へ赴き、夕方病室に戻ってくる、ということを繰り返していました。とにかく一生懸命でし

た。

その父の出直した日は、昭和59年10月25日に勤められた「東西礼拝場ふしん竣工のお礼づとめ」の約ひと月半前というタイミングでした。この喜びの日を待たずに出直したのです。「なぜだ」と思いました。「あれだけ命懸けで普請に尽くしてきたのに、どうして親神様はそこまで父を置いてくださらなかったのや」と思いました。さらに「あと1年5カ月置いてくださったら、待望の教祖百年祭に間に合ったのに、どうして」と思いました。この時は信仰を見失いかけました。

その後、慌ただしく事情運び、就任奉告祭を済ませ、以降会長としての歳月を重ねる中に、ようやく父の出直しには親神様のお計らいがあったことに気付きました。

その一つは、父は終戦後、ソ連の捕虜となり、極寒の地シベリアで11年間という長期抑留生活を過ごし、強制労働を強いられました。その間に心肥大になり肝臓も大きなダメージを受けていました。戦友たちは次々と亡くなり、父もいつどうなってもおかしくないような状態であったところ、無事帰国を果たし、その後67歳まで置いていただいたことに気付きました。寿命の御守護を頂いたのです。これにはありがたいと思いました。

また、井筒家へ養子に来てから、芦津大教会の再出発と復興、本部での重要な御用の数々と、親神様から大きな御用を担わせていただきました。殊に最後の御用となったのが、東西礼拝場ふしんですが、実は父が出直す前に東西礼拝場の建物は完全に出来上がっていました。出直しの数日前には病室に関係者を集めて、竣工披露の最終の打ち合わせも終え、全てをやり遂げていたのです。普請の関係者から、「君のお父さんは、この普請を万端最後まできっちりと勤め上げてくださったんだよ」と聞かされました。親神様は、父の生涯において、数々の大切な御用を勤めさせてくださり、人生最後の締めくくりとして、東西礼拝場ふしんという、実に素晴らしい御用を担わせてくださったのです。これもまた、ありがたいと思いました。親神様の親心です。

ただ、あとひと月半、命を置いていただいたら、あと1年5カ月置いていただいたら、という問題が残りますが、これは父に対してではなく、家族や芦津に繋がる人人、その中でも私自身の問題であることが分かりました。教祖は子供の成人を促される親心から現身を隠されましたが、このひながた通りなんだと気付きました。

つまり、親神様はこの節を通して、私に対して、父の後を追いかけて、しっかりとたすけ一条の道を進みなさい、という厳しくも温かい親心を掛けてくださったのだと、芯から得心することができました。後々になって、父の出直しの意味が分かり、この節にこもる親心を悟らせていただけました。

## 教祖現身お隠しの節

教祖お隠れの大節に遭遇された、先人先輩方も同様だと思います。明治20年陰暦正月26日は、教祖年祭の元一日の日ですが、この日、厳しくおつとめの勤修を急き込まれてきた教祖の御身上が、いよいよ迫るという緊迫した状況の中、初代真柱様の「命捨てても」という心定めを受けて、先人たちは勇んでおつとめを勤められました。「教祖が急き込まれたおつとめを、勤めることができた。これで教祖は元気になってくださる」と引き上げてきた先人たちが目にしたのは、息をしておられない教祖のお姿だったのです。「教祖は115歳までおいでくださって、私たちを導いてくださるんだ」と固く信じていた先人方は、現身を隠されたという現実に混乱して、すぐに親心を感じることなど到底できなかっ

たと思います。まして存命の理など、十分に理解することもできなかったでしょう。先人たちがこの教祖年祭の元一日の節にこもる親心を知ったのは、後になってからのことです。

お姿をお隠しになってから、人人に広くおさづけの理をお渡しくださるようになり、おさづけの取り次ぎに教祖は存命の理を以ってお働きくださるようになりました。このおさづけの理を拝戴してようぼくになり、各地でおたすけに励む中に、おさづけの取り次ぎで不思議な御守護を頂くようになり、お道は破竹の勢いで伸び広がったのです。こうした御守護の姿を目にした先人たちは、「教祖はお姿が見えないだけで、確かに働いてくださっているんだ」と、存命の理を実感したのです。

こうして、教祖がお姿を隠された事実の中に、ようぼく一人ひとりが、おつとめを真剣に勤め、おさづけを積極的に取り次いで、たすけ一条の道を勇んで進んでほしいと、人々に成人を促してくださった教祖の親心があることを、胸に刻まれたに違いないと思うのです。

節には親神様の思惑があり、そこには必ず親心があることを知って、それに気付くことが肝心です。後になって、「あの節があったから今の私がある。今の教会がある」と思えるようになれば、これは節から芽が出る御守護の姿だと思うのです。

## 節から芽が出る

私たちは教祖から、「節から芽が出る」と教えていただいています。でも、じっとしていては芽は出ません。芽を出すためには努力が必要です。節は心を定める旬でもあります。親神様が、

**ふし〳〵心一つ定め。どういう、あちらもふしや、こちらもふしや、だん〳〵ふしや。心定めの理や〳〵、定め心の理や。**

**明治21年9月10日**

と教えてくださるように、節をお見せいただいたら、心を定めることが肝心です。

**もうあかんかいなあ〳〵というは、ふしという。精神定めて、しっかり踏ん張りてくれ。踏ん張りて働くは天の理である、と、これ論し置こう。**

**明治37年8月23日**

とも教えられるように、節があれば心を定め、精神を定めて、踏ん張って勤めれば、親神様も踏ん張って働いてくださるのです。

たすけてやりたい、成人させてやりたい、という親心が込められているのが節です。親神様のお力添えを頂いて、芽を出すのです。たとえ節を見せていただいても、その節から芽が出る御守護を頂けるよう、心を定め、精神を定めて勤め切らせていただきたいものです。

## たすけ一条の道

親神様の思召の根本は、「可愛い子供である世界中の人々を、余すことなくたすけ上げて、陽気ぐらしの世界を実現すること」です。そして、この世を陽気ぐらしへ建て替えるために、教祖がお付けくださったのが、たすけ一条の道です。このたすけ一条の二本柱が、つとめとさづけです。おつとめは、

**このつとめなんの事やとをもている よろづたすけのもよふばかりを**

**二号　9**

**はや〳〵と心そろをてしいかりと つとめするならせかいをさまる**

**十四号　92**

と教えられるように、おつとめは、世界・世の中のいんねんを切り替えるための手立てです。殊にかぐらづとめの理を戴いて勤める各教会の大祭・月次祭は、世界の人々のたすかりと世の治まりを真剣に祈念して、陽気に勇んで勤めなければなりません。

その一方で、おさづけは、このおつとめの理を取り次ぎます。おつとめは、たすけの根本であり要ですから、このよろづたすけのおつとめの理を取り次ぐのが、おさづけです。その取り次ぎ方は一対一での取り次ぎです。つまり、個人のいんねんを切っていただくのが、おさづけです。

世界のいんねんを切り替えるおつとめと、個々のいんねんを切るおさづけ。この「つとめとさづけ」で、陽気ぐらしへと建て替えていく。これが親神様の思召であり、

たすけ一条の道の根幹なのです。

おつとめは、大勢で勤めることが多いと思います。大祭や月々の月次祭はもちろんのこと、各会の総会のおつとめや、おぢばへの団参など、たくさんで勤めれば、より勇み心が湧いてきます。おつとめは、信仰生活の中でも、最も身近にあるものの一つだと思います。

その一方で、おさづけの取り次ぎは、個々に委ねられています。その気にならなければ、取り次ぐ機会がないと思います。おさづけを取り次ぐ場面であるにもかかわらず、自分自身に言い訳をし理由を付けて、取り次ぎを回避することがないか、胸に手を当てて、よくよく思案する必要があります。

**なさけないとのよにしやんしたとても**
**人をたすける心ないので**
**十二号　90**

との一首は、親神様が私自身に問いかけてくださっているお言葉だと、肝に銘じることが大切です。

おたすけの機会は、親神様が用意してくださるのですから、機を逃すことなく取り次がせていただくのがおさづけです。

このおさづけの取り次ぎによって頂戴する御守護ですが、これは、御存命の教祖のお働きの賜物以外の何物でもありません。ですから、おさづけを取り次ぐことで、存命の理を実感できますし、教祖を身近に感じることができるのです。

このおさづけをしっかりと取り次いで、おたすけに勇んで励んで、陽気ぐらしへの歩みを進めてほしいということが、明治20年以降、人々に広くおさづけの理を渡されるようになった、親神様の思惑に違いないと思います。

ところで、お道の者は、「世界たすけ」という言葉をよく口にし、耳にすると思います。親神様の「世界いちれつをたすけたい」との思召にお応えするために、私たちが実践するのが世界たすけです。世界たすけと言っても、何も一遍に世界中の人をたすけるわけではありません。親神様が、

**一人救けたら萬人救かるという**
**心持ってくれ。**
**明治37年12月14日**

と諭されたように、まずは一人の人のおたすけをすることです。この一人から、周囲の人へとたすけの輪が広がっていくのです。この眞明芦津の道も、井筒たねという一人の赤子をたすけていただいたことに始まっているのです。親神様は、

**一人でも救けにゃならんという**
**心を定め。　明治20年12月13日**

とお仕込みを下さっています。悩み苦しんでいる目の前の一人の人のおたすけをすることが、ようぼくにとっての世界たすけなのです。

親神様の壮大なる思召を実現するために、教祖がお付けくださった、たすけ一条の道。その具体的な手立てとして教えていただき、理を授けてくださったのが、おつとめとおさづけです。このつとめとさづけで必ず御守護を頂くのだ、たすけていただくのだ、との自信を胸に湛えて、共にたすけ一条の道にしっかりと励ませていただいて、ようぼくとしての勤めを勇んで果たしていきたいと思います。

## 最後の一日まで一生懸命に

真柱様がまだ継承者で青年会長であった、教祖百年祭の前の年に、青年会芦津分会はご臨席を頂いて、総会を開催しました。直会の最後の締めで私は勢いよく、「教祖百年祭万歳！」と声を上げたのです。このとき青年会長様は、苦虫を噛みつぶしたような顔をしておられました。そして、「教祖の年祭はお祝い事ではない。万歳をするような旬ではない」と、厳しく注意をされたことを思い出します。

子供である人間の成人の鈍さ、成人の至らなさから、教祖にお姿を隠させてしまった、という大節が教祖年祭の元一日です。ですから年祭活動は「やれるだけ」「できるだけ」ではならないと思います。

教祖百四十年祭まで、残すところ3カ月。最後の仕上げのときです。御存命の教祖から、「よくここまで勤めてくれた」「よく成人してくれた」と、お喜びいただけるように、最後の一日までたすけ一条の道を明るく勇んで、一生懸命に進ませていただきたいと存じます。

どうか、一層勇んだ三年千日締めくくりのご丹精をお願い致しまして、神殿講話とさせていただきます。

（要旨）

## 立教百八十八年　秋季大祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、神人和楽の世を楽しみに、人間世界をお創め下され、元初りのお約束によって教祖を神のやしろにこの世の表に現れ下さいまして、これの世界たすけの御教えをお啓き下さいました。爾来、深淵なる親心にお導き下され、数々の結構な御守護をお垂れ給い、陽気ぐらしへとお連れ通り下さいます御慈愛の程は、唯々有り難く勿体無い極みでございます。その中にもこの月の二十六日は、御本部におかれては立教の元一日を記念して秋季大祭をお勤め下さいますが、当教会にてもその理を戴いて、只今から、お役にあずかる者一同、をやの御心に溶け込み、勇んで座りづとめ、陽気てをどりを勤めて、秋の大祭を執り行わせて頂きます。御前に参り集う芦津の道の子達が、喜び心も一入に、おうたを唱和して共におつとめを勤め、日頃賜る厚き御恵みに御礼申し上げ、世界の人々のたすかりと世の治まりを請い願って、一心に親心にお縋りする真実の状をも御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

年祭活動も大詰めを迎えた今日、私共をはじめ芦津に繋がる教会長、ようぼくは、親神様の御守護と教祖の御存命のお導きのまに〳〵、十月を仕切って、おたすけと丹精に真心を尽くし、おぢばへのつくし運びに真実を重ねてまいりました。

教祖百四十年祭に向けてこれからの三カ月も、一層一段と勇み心を弥増して、どうでも教祖にお喜び頂けるよう心の成人に拍車をかけて、一手一つに年祭活動を勤め切らせて頂く決心でございます。

何卒、芦津に繋がる一同の、時旬に尽くす誠真実を大いなる御心にお受け取り下さり、不思議自由のお働きを賜りまして、教祖年祭の旬に相応しいたすけ一条の道の進展を御守護下さいますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

## 秋季大祭　祭典役割

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 祭主 | 大教会長 | 扉者 | 奥田眞治 | 扉者 | 山本義範 | | 大教会長 井筒敏成 | 瀧本庄司 | 奥田正儀 |
| 指図方 | 今川政治 | 賛者 | 岡本久昭 | 賛者 | 梶川和人 | | 湯川正圀 | 梶川和隆 | 吉田裕樹 |
| | | | | | | | 会長夫人 | 木村真次 | 川畑正博 |
| | | | | | | | 前会長夫人 | 宗我邦代 | 岩切治代 |
| | | | | | | | 奥田富美子 | 竹内淳子 | 山本広子 |
| | | | | | | | | 加世田陽子 | 木村理恵 |
| 献饌長 | 岩切正教 | 伝供 | 川畑澄博 | 竹内義忠 | 岩切正義 | 河端芳雄 | 西本義之 | 中村俊和 | 奥田正儀 |
| | | | | | | | 今川聖一 | 西本興正 | 新居里実 |
| | | | | | | | 湯川正信 | 吉田裕樹 | 川畑正博 |
| | | | | | | | 榎康紀 | 瀧本亘 | 望月慶太 |
| | | | | | | | 梶川芳征 | 宗我道明 | 荒木志朗 |
| | | | | | | | 堤文雄 | 山本繁正 | 山田直実 |
| | | | | | | | 段野渉 | | |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 地方 | 奥田正徳 | 岩切正義 | 新居里実 | 笛 | 竹内義忠 | 琴 | 井筒ちぐさ | 三味線 | 岡島きよの |
| | 岩切正教 | 吉田裕和 | 西本興正 | ちゃぽん | 岡島秀男 | 拍子木 | 井筒文夫 | 太鼓 | 瀧本眞二郎 |
| | 山田道弘 | 浜田宣郎 | 瀧本 | すりがね | 守田清一 | 小鼓 | 川畑澄博 | 胡弓 | 中村美津代 |
| | | | | | 樋川泰士 | | 岩切孝子 | | 梶川りよ子 |
| | | | | | 立花善文 | | 西本義之 | | 石川健郎 |
| | | | | | 中村俊和 | | 立花善三 | | 松森明美 |
| | | | | | 今川聖一 | | 浜田千代実 | | 瀧本美奈 |
| | | | | | 望月慶太 | | 村田光伸 | | 榎康紀 |
| | | | | | 瀧本亘 | | 梶川芳征 | | 梶川正美 |

# 喜びの奉告祭

芦ノ郷部属・芦美屋分教会（愛知県名古屋市）は、11月2日、大教会長をお迎えして、榎つよ子・三代会長就任奉告祭を執り行った。

午前11時、榎会長の祭文奏上に続いて、大教会長が挨拶。「ぢばと息一つに心を合わせ、教会に繋がる方々と一手一つに、陽気ぐらしの手本になる教会を目指してほしい」と期待を述べられ、「新しい会長を芯に、教会に関わる方々が心を寄せ合って、成人の歩みを進んでもらいたい」と望まれた。

最後に、一昨年に出直した前会長の41年間にわたって教会長として勤めた功績を称えられた。

一手一つにおつとめを勤めた後、榎会長が挨拶。「今日の日を新たな門出として、親の思いに沿い、歴代会長から受け継いだ御恩報じの道をしっかりと次世代へと繋いでいけるよう精いっぱいつとめさせていただきます」と決意を述べた。

場所を移した祝賀会では、談笑しながら和やかな時間を過ごした。参拝者は、35名であった。

## 第99回天理教青年会総会

青年会

10月25日、本部中庭で、「第99回天理教青年会総会」が開催され、芦津分会からも多くの青年会員が参集した。

式典では、青年会長様の御告辞を拝聴。青年会長様は、「来年の第100回青年会総会に向けて、改めて青年会活動の根幹に立ち返り、布教、求道、伏せ込みに邁進しよう。そしてそれを通じて、一人でも多くの若者が同じ意識を持って共に活動し、あらきとうりようの真価を発揮したい」と仰せられた。

総会当日、式典に向かう青年会員

その後、真柱様のメッセージを中田善亮表統領が代読。年祭活動の意義に触れられ、残り少なくなった年祭までの日々をあらきとうりようらしく熱心に励んで通り切ってくれることを願われた。

今回の総会では、たすかってほしい方の名前を事前に「おたすけ願」に記入し、総会当日に回収。式典終了後にかんろだいにお供えし、青年会長様を芯にお願いづとめが勤められた。

芦津分会は、夜に詰所食堂で、「たっぷり勘定」を開催。山芋焼き、ジャーマンポテトサラダなどの料理や飲み物で大勢の帰参者に喜んでいただいた。大広間ではファミリーパークを実施し、家族連れが楽しい時間を過ごした。

「たっぷり勘定」

## 創立130周年記念祭

### 東津分教会

東津分教会（今川聖一会長・大阪市住吉区）は、10月19日、大教会長ご夫妻をお迎えして、創立130周年記念祭を執り行った。随行は、井筒文夫役員。

午前10時30分、今川会長が祭文を奏上し、続いて、一手一つにおつとめが勤められた。

おつとめ終了後、大教会長が挨拶。「130年に亘って東津の道の上にお掛けくださった親神様の御守護、教祖の親心にお礼を申し上げるとともに、初代の道すがら、先人先輩方の祖霊様に心からお礼を申し上げ、その信仰を受け継いで次の10年への歩みを勇んで一手一つに力強く踏み出していただきたい」と話された。

その後、挨拶に立った今川会長は「10年後を見据えて、まずは目の前の教祖百四十年祭に向かって、皆で勇んで通らせていただき、教祖にお喜びいただけるよう、また先人先輩方にもお喜びいただけるよう、たすけ一条の道を明るく勇んで通らせていただきたい」と決意を述べた。

祭典後の祝宴では、ステージで鼓笛隊とOBバンドの合同演奏や、福引き大会など、喜びいっぱいの楽しいひとときを過ごした。

参拝者は、186名であった。

## 眞明組

### おやさと伏せ込みひのきしん

10月26日、芦津大教会から分離した大教会と共に「眞明組おやさと伏せ込みひのきしん」を実施。

秋季大祭終了直後より、参加者は西境内地の除草ひのきしんを始め、途中からは中庭、西礼拝場前、南礼拝場前のパイプ椅子約3千脚の撤収を行った。二人一組で運ぶ夫婦、一人で多くのパイプ椅子を抱えて運搬する青年会員など、親里で勇んだひのきしんを展開した。終了後、笠岡大教会長・上原明勇先生の挨拶の後、記念撮影を行った。

芦津からの参加者は約400名を数え、6大教会合計で1千500名を超えるようぼく、信者がひのきしんの汗を流した。

## 第35回関東地区芦津会開催

10月13日、「第35回関東地区芦津会」が東京教務支庁で開催され、42名が参加した。

三殿礼拝の後、座りづとめを勤め、「諭達第四号」を拝読。続いて、竹内義忠役員より挨拶があり、その中で併せて勤める「布教推進隊」の趣旨説明を行った。布教実動では教務支庁周辺のリーフレット配りを実施し、帰庁後、4班に分かれて振り返りを行った。

神殿で記念撮影の後、食堂で懇親会。ビンゴが催されるなど終始和やかな雰囲気の中、閉会した。

## 布教推進隊

布教部

〈大阪ブロック〉

10月12日　大教会

派遣員の趣旨説明の後、班に分かれ、大教会周辺の神名流し、路傍講演を行い、その後戸別訪問、リーフレット配りを行った。

布教実動終了後は、陽気ホールで振り返りを行い、参加者からは、「一人ではなかなかにをいがけに出ることが難しいので、こうした機会があり、ありがたい」との声があった。

参加者は、22名であった。

大教会周辺での神名流し

11月6日　東津分教会

派遣員の趣旨説明の後、2班に分かれて、それぞれ駅まで神名流し、駅前で路傍講演を行い、リーフレット配りや戸別訪問も行った。

ＪＲ杉本町駅前での路傍講演

終了後は、この日の感想や、普段の布教活動について、活発な意見交換を行い「路傍講演を通して、人にこの教えを分かりやすく伝えるために、もっと教理を学ぼうと思った」「こうした大勢の方とのにをいがけで感じたことを、普段の自分自身のにをいがけに生かしていきたい」との感想が聞かれた。

参加者は、20名であった。

〈東京ブロック〉

10月13日　東京教務支庁

「第35回関東地区芦津会」に併せて行われ、42名が参加した。

派遣員の挨拶の後、数名1組となり、教務支庁周辺の住宅地でリーフレット配りを行った。

布教実動終了後は、教務支庁で振り返りを行い、「今日が初めてのにをいがけだった。帰ってからも近所でのリーフレット配りを始めようと思う」「大教会から来ていただき、大勢でにをいがけができたことがこれからの大きな勇みとなった。ありがたかった」などの声が聞かれた。

教務支庁周辺でのリーフレット配り

〈和歌山ブロック〉

10月29日　和歌山教務支庁

派遣員の趣旨説明の後、3班で神名流しを行い、その後、個々に分かれて教務支庁まで戸別訪問を行った。

布教実動後の教務支庁での振り返りでは、「教会長さんと廻った戸別訪問では、声の掛け方などとても勉強になった」「芦津の教友とする神名流しでとても勇ませてもらった」といった声が聞かれた。

参加者は、20名であった。

振り返りでの活発な意見交換

## ファミリーおつとめの集い

**稗島分教会**

稗島分教会（竹内義忠会長・兵庫県尼崎市）は、11月2日「ファミリーおつとめの集い」を開催した。

午前10時30分から、6交替でおつとめを勤め、「諭達第四号」拝読の後、竹内会長が挨拶。かしもの・かりものの話を基に、おつとめの大切さについて話した。

午後からは、食堂に場所を移し、お楽しみ行事。さまざまな模擬店やアトラクションで、家族揃って楽しい時間を過ごした。

参加者は94名であった。

## 教務部報

**教人登録**

木村　昌恭（芦明徳）
立教188年10月1日

**修養科第1010期修了**

畠中　元（芦山都）
立教188年10月27日

**おさづけの理拝戴《9月》**

中島かのん（上有明）
前田　裕教（上有明）
竹田　衣那（大　島）
〈拝戴日順　3名〉

**初席《9月》**

〈1名〉鳥栖、甲山、芦大熊
〈順序運びより　3名〉

## ■訃　報■

**大教会役員**
**芦東分教会二代会長**
**本津分教会六代会長**
**吉田重男さん**

令和7年10月21日出直され

た。享年97歳。

告別式は10月25日、井筒文夫・大教会役員斎主のもと、千葉県松戸市の芦東分教会で執り行われた。

昭和2年和歌山県有田郡で父・江川重兵衛、母・きくのもとに生まれ、20年箕島商業高校卒業、22年肺病を鮮やかなおたすけを頂いて入信、24年おさづけの理拝戴、25年専修科卒業。その後、東京で単独布教を開始、28年吉田昶子・芦東分教会初代会長と結婚、29年芦東分教会二代会長就任、31年大教会准役員、37年修養科一期講師、41年大教会役員、49年教祖九十年祭地方講習会講師、58年教祖百年祭推進委員会常任委員。平成2年本津分教会六代会長就任、同24年辞任。

大教会においては、育成部長、教養部長、会長室長などの重責を歴任された。

神一条、親一条の信仰に徹せられ、定めたことはどうでも貫く信仰信念であった。また穏やかで優しい性格で、普段から口数は多くなく、自らの行動、態度をもって多くのようぼく、信者を導かれた。

## 月例統計（自令和7年1月1日～至令和7年9月30日）

| 項目／名称（）内教会数 | 初席 | のお理さづけ拝戴 | 修養科修了 | 教人 |
|---|---|---|---|---|
| 大教会（1） | 10 | 5 | | |
| 靱（13） | 2 | | | |
| 東津（23） | 4 | 3 | 5 | |
| 吉野川（29） | 7 | 5 | 1 | |
| 島原（16） | 6 | 7 | 2 | |
| 日方（15） | 4 | 5 | | |
| 稗島（7） | | | | 1 |
| 本津（2） | | | | |
| 日高（2） | | | | |
| 姶良（5） | | 1 | | |
| 津和（12） | 2 | | | |
| 門司（6） | 2 | 2 | | 1 |
| 當別（6） | 2 | | | |
| 大島（26） | 10 | 6 | 5 | |
| 沖縄（3） | | | | |
| 尼崎（2） | 1 | 1 | 1 | |
| 四ツ山（5） | 3 | 1 | | |
| 大冠（2） | | | | |
| 島下（1） | | | | |
| 天保山（3） | | | | |
| 青木（1） | | | | |
| 芦浪（1） | 1 | 2 | | |
| 甲邊（1） | | 1 | | |
| 芦華（1） | | | | |
| 天津（1） | 1 | 1 | 1 | |
| 入江（1） | | | | |
| 豊野（1） | 2 | | | |
| 紀周（3） | 3 | 2 | 2 | 1 |
| 勝明（1） | | | | |
| 神の島（1） | | | | |
| 兵庫眞洲（1） | | | | |
| 芦ノ郷（2） | | | | 1 |
| 本明勇（2） | | | | |
| 明道（1） | | 1 | 1 | |
| 芦東（1） | | | | 1 |
| 和鎮（3） | 1 | 2 | | |
| 神滝本（1） | | | | |
| 芦明徳（1） | 3 | 1 | 1 | 1 |
| 真明彰化（2） | 10 | 1 | 2 | |
| 本氣（2） | | | | |
| 芦明照（1） | | | | |
| 真伯（1） | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| 合計（209） | 74 | 47 | 21 | 6 |